

EDRA 43 のシンポジウム

IBASHO: Emerging Placemaking by Citizens in Japan を終えて

田中康裕 清水建設

1. シンポジウムまで

近年、日本から多くの研究者が EDRA や IAPS に参加するようになったが、研究者が個々に参加するだけでは日本の状況について十分に議論できない。そろそろ日本の研究者で、まとまった研究報告ができる時期になったのではないか。大野隆造先生のこのような提案から、EDRA42では日本の研究者6名によるシンポジウムが行われ^{*)}、引き続き EDRA43でも2つのシンポジウムが企画されることとなった。その1つが「IBASHO: Emerging Placemaking by Citizens in Japan」である。

EDRA43の全体テーマは「Emerging Placemaking」。日本建築学会の環境行動研究小委員会では、2010年10月に『まちの居場所』を出版していたこともあり^{*)}、2011年7月の小委員会の場で、鈴木毅先生が「まちの居場所」についてのシンポジウムを提案された。これを受け『まちの居場所』の出版に関わったメンバー（でEDRA42に参加していないメンバー）4人が研究報告することとなった。EDRAのシンポジウム枠は90分。報告者を4人としたのは、EDRA42では6人が研究報告したところ十分に議論する時間がなかったと伺っていたからである。

その後のやりとりを記すと、9月23日にアブストラクトを投稿。12月半ばに採択通知が届いた。内容については好意的なコメントをいただいたが、方法論が曖昧だという指摘。この指摘をふまえた修正版のアブストラクトを2012年1月9日に投稿した。その後、先生方と何度かメールをやりとりして内容を調整し、6月1日のシンポジウムを迎えた。

2. シンポジウム

■Chair

Takeshi Suzuki, Osaka University

■Presenter

1. Yasuhiro Tanaka, Institute of Technology, Shimizu Corporation: Design Methods of Community Cafés
2. Shigeki Matsubara, Osaka University: Influence on Neighbor Users of Ibasho across All Generations
3. Akihiko Iwasa, Niigata University : Ibasho in

Temporary Housing of Disaster Victims

4. Hiroshi Tachibana, Jissen Women's University: Characteristics & Values of Ibasho in Japan

■Discussant

Sanjoy Mazumdar, University of California

Emi Kiyota, Ibasho

最初に鈴木先生から、公共が建築・都市計画をリードしてきた日本において、「まちの居場所」が同時多発的に開かれるというエポックメイキングな出来事が生まれているという説明と、このシンポジウムでは、環境行動研究の観点からみた「まちの居場所」の意味・価値について、また、「まちの居場所」に対する環境行動研究の研究者、環境デザイナーの役割について議論したいという問題提起がなされた。

研究報告として、筆者は「まちの居場所」を開き運営するという観点から、2000年頃から各地で開かれているコミュニティ・カフェをとりあげ、そこで目指されていることと運営のあり方の特徴について報告した。松原茂樹先生は、来訪者にとっての「まちの居場所」という観点から、大阪とアメリカの4カ所のカフェ／サロンにおける来訪者の属性と過ごし方について、詳細なデータに基づく報告をされた。岩佐明彦先生は、新潟県中越地震（2004年）後に建設された仮設住宅における「仮設 de 仮設カフェ」と、そこで収集した仮設住宅を住みやすくするための知恵・方法を、東日本大震災（2011年）後に公開したウェブサイト「仮設のトリセツ」^{*)}の実践・研究をとりあげ、非日常／テンポラリーな「まちの居場所」と環境行動研究の研究者が果たし得る役割について報告された。以上の報告のまとめとして、橋弘志先生はアクセシビリティ、親密性・地域性、行為の許容性、相互行為の多様性、運営の柔軟性、多機能性の観点から「まちの居場所」の特徴を説明され、その価値を捉えるための観点として正統的周辺参加、脱消費至上主義、サードプレイス、コモン、弱い紐帯、媒介者を提示された。

ディスカッサントは、昨年に引き続きサンジョイ・マズムダー先生が快く引き受けてくださった。マズム

ダー先生からは、創造性が求められるオフィスや研究室においても未完結性が人々の参加を引き出すという意味で重要だという「まちの居場所」との共通点について、また、インドの住宅は大きい人々がやって来て、お茶を飲んだりおしゃべりしたりしているという日本以外の社会の状況等について、広い視野から話題を提供していただいた。さらに、人と人との関係（紐帯）について、強力であるが故に他者を排除してしまうような凝り固まった紐帯を解きほぐし、人と人とを結びつけ直すのが「居場所/Ibasho」の中心となる役割ではないかというコメントをいただいた。

なお、ディスカッサントを依頼していた清田英巳氏は、ホワイトハウスでの会議のため急遽シンポジウムを欠席されることとなった。アメリカにおいて、あえて日本語を英語表記にした非営利組織「Ibasho」*1) を立ち上げ実践・研究されている清田氏には、環境行動研究において「居場所/Ibasho」の概念に注目することの意義についてコメントをいただく予定であったため、非常に残念であった。

3. シンポジウム後

シンポジウムの会場では、参加者が少なかったこと、時間に余裕がなかったこともあり、十分な議論や情報交換ができなかったが、帰国後、出版社ラウトレッジ (Routledge) の編集者からメールが届いた。シンポジウムには参加されなかったが、プロシーディングに掲載されたアブストラクトを読んで興味を持ってくださったようで、出版を考えて欲しいという依頼であった。ラウトレッジではこれまで **Placemaking** についての書籍を多数出版してきたが、アジア、特に日本の動向については十分に把握していない、とのこと。話は思わぬところから展開していくものである。編集者へは出版の意志を伝え、現在、執筆に向けた準備を行っている。「居場所/Ibasho」の概念を英語で伝えるのは困難だが、口頭発表ではなく書籍ということで、具体的な事例を丁寧に記述することで、少しでもこの概念が伝わるようにしたい。そして、このような試みを通じて「居場所/Ibasho」もより豊かな概念として練りあげられていくと考えている。

4. おわりに

この原稿を書くにあたって、シンポジウムのことを改めて思い返している。筆者はシンポジウムにおいて、コミュニティ・カフェというサードプレイス的な

場所について報告を行ったが、マズムダー先生は住宅（ファーストプレイス）やオフィス（セカンドプレイス）についても言及された。「居場所/Ibasho」は、サードプレイスに限らず、ファーストプレイスやセカンドプレイスについても取り扱える概念であり、人が豊かに生活していく環境を実現していくためのキー概念になり得るし、そのような概念として育てて欲しいという課題を投げかけてくださったのではないかと。あくまでも個人的な思いだが、マズムダー先生のコメントをこのように受け止めている。

最後にシアトルの街のことを少し。シアトルではシアトル公立図書館、ウエストレイク・パーク、ガスワークス・パーク、シアトル大学とワシントン大学のキャンパスなどを見学することができた。しかも、単に見学するだけでなく、環境行動研究という同じ視点をもつ先生方と、これらの場所の体験を共有し、議論することもできた。岩佐先生は「毎日、学会のワーキングをしているみたいだ」とおっしゃっていたが、この言葉の通りシンポジウムの会場の外でも貴重な時を過ごすことができた。多くの先生方が「まちの居場所」について研究されている中で、年少の筆者にシンポジウムへの参加の機会を与えていただいたことには感謝している。

□注

- *1) EDRA42の詳細は以下を参照。横山ゆりか「EDRA 42のシンポジウム Human Interaction, Design, and Use of Space in a Densely Populated Culture を終えて」*MERA Journal*, Vol. 14, No. 2, p63, 2011年12月
- *2) 日本建築学会編『まちの居場所- まちの居場所をみつける/つくる』東洋書店、2010年
- *3) <http://kasetsukaizou.jimdo.com/>
- *4) <http://www.ibasho.org/>



シンポジウムの様子（撮影：林田大作）